

幼児期の食事の意義理解

—母親の養育態度と母親の食意識や食事のしつけの関連—

瀬尾知子 (秋田大学教育文化学部講師) 榊原洋一 (お茶の水女子大学教授)

要約

本研究では、はじめに子どもの気持ちにそった対応をとる安定・応答的な養育態度、子どもに罰を与えることを厭わない厳しい養育態度、子どものなすがままにさせる放任的養育態度の母親では、母親の食意識・子どもの食行動の対応が異なるのか検討を行った。結果、安定・応答的な養育態度の母親の食意識は高く、放任的養育態度の母親の食意識は低かった。また、厳しい養育態度の母親は、子どもの食行動の問題の違いにより対応が異なっていた。次に、食事の意義を生物学的なもの和社会的なものに分け、前者は食事を身体健康と関連付けて理解すること、後者は他者と食卓を囲んで食べることを楽しいと捉えることと定義し、母親の食意識の違いにより、幼児の食事の意義理解は異なるのか検討を行った。結果、食意識が高い母親の子どもは食意識が低い母親の子どもより食事の生物学的意義・社会的意義ともに理解得点が高かった。以上の結果から、母親の養育態度の違いにより母親の食意識・食行動の対応が異なっており、母親の食意識の違いは幼児の食事の意義理解に影響を与えることが明らかになった。

キーワード：養育態度、幼児期、食意識、食事の意義、母親

問題と目的

食事は生理的欲求を満たす本能的行動である (Rozin, 1999) と考えられているが、いつ、何を、どのように食べるかは食事経験を通して学習する (今井, 2005)。先行知見では、母親の養育態度や食意識が幼児の食行動に影響を与えることが明らかになっている。例えば、八倉巻ら (1992) は、子どもの状況に応じた対応をとる安定・応答的な養育態度の母親の子どもは食行動の問題が少なく、子どものしつけに甘く、子どもの好きにさせる放任的養育態度の母親の子どもは偏食、食欲不振が多いことを示している。また、高畑ら (2006) は、母親の食意識が高いほど、子どもの食事への興味が高いことを示している。本研究では、子どもが食事の意味をどのように捉えているのかに着目し、幼児の食事の意義理解に母親の養育態度や食意識が影響を与えるのか検討する。

食事の意義には食べて栄養をとるといった生物学的意義と、マナーの習得や会食といった社会的意義がある。幼児の食事の生物学的意義理解を検討した研究に、外山 (2007) や瀬尾・榊原 (2013) がある。外山 (2007) は5歳で食事と身体健康を、6歳で食事と身体と心の健康を因果的に関連付けて判断することを明らかにした。また、瀬尾・榊原 (2013) は、幼稚園や保育所での食事場面の保育者の働きかけが、幼児の食事の生物学的意義理解に影響を与えることを示した。食事場面の保育者の働きかけが幼児の食事の生物学的意義理解に影響を与えることから、家庭で子どもに食事を与える主担当である母親の食事場面の働きかけが、幼児

の食事の生物学的意義理解に影響を与えることが推測される。また、幼児の食事の社会的意義理解に関して、外山・無藤 (1990) は、家庭の食事で食事場面の観察から、子どもは母親との食事場面のやりとりを通して、食事を食べて栄養をとるといった生物学的意義の強い場から、コミュニケーションを楽しむといった社会的意義の強い場へと変化することを示した。このように、母親の食事場面の働きかけは、幼児の食事の社会的意義理解に影響を与えることが推測される。先行知見では、母親の養育態度が幼児の知的、言語的、社会的発達に影響を与えることを示している。NICHD (2006) の調査では、母親が子どもに対して、応答性に富み、知的働きかけが多いほど子どもの知的、社会的発達がよいことを、内田ら (2009) の調査では母親の養育態度が子どもの語彙能力に影響を及ぼすことを明らかにしている。家庭の食事で子どもが食べていないときは、母親は積極的に食べることを促さなければならず (外山・無藤, 1990)、それが行き過ぎると子どもが食事を不快なものとして捉える (昌子, 1985)。食事は、子どもの食事の世話としつけといった養護と教育の機能を併せ持ち、母親のしつけが強く表れる場面であるといえる。そして、母親の食事の考えや養育態度が子どもの食事の意義理解に影響を与えることが推測される。

本研究では、はじめに母親の養育態度の違いにより、子どもへの食事場面のしつけや食事に関する考え方が異なるのか検討する。次に、母親のしつけや食事への考え方の違いにより子どもの食事の意義理解が異なるのかを検討し、母親の養育態度の違いが幼児の食事の意義理解に与える影響を明らかにする。

調査1

調査1では、母親を対象に質問紙調査を行い、養育態度の違いにより、子どもの食事場面の対応や食意識が異なるのかを検証することを目的とした。先行知見では、安定・応答的な養育態度の母親の子どもの食行動が良く（八倉巻ら、1992）、母親の食意識が高いほど子どもへの関わりが積極的で子どもの食事への興味も高い（高畑ら、2006）。このことから、母親の養育態度が安定・応答的な養育態度の母親の食意識は高く、子どもの食行動も良いと考え、安定・応答的養育態度の母親の食意識は高いという仮説を立て検証した。

方法

調査対象者 東京都内私立幼稚園、保育所に通う3歳児（149名：男児74名、女児75名、平均年齢(m):3:9、標準偏差(SD):3.36)、4歳児（138名：男児75名、女児63名、m:4:8、SD:3.25）、5歳児（121名、男児65名、女児56名、m:5:8、SD:3.60）の子どもの母親408名であった（700部配布、回収率58.3%）。

調査方法 2012年11月から2013年2月、幼稚園、保育所を通じて保護者に質問紙を配布し回収した。

調査内容 母親の養育態度の尺度は、NICHD（2006）のクオリティケアに関する尺度8項目を菅原ら（2012）が翻訳したものを使用した。「○○ちゃんの見聞・要望を考慮してルールをつくるようにしている」等、子どもの気持ちにそった対応をとる「安定・応答的」養育態度（以下、「安定・応答」）4項目、「何かをわからせるためであれば、適切な体罰は必要だ」等、子どもに罰を与えることを厭わない「厳しい」養育態度（以下、「厳しい」）2項目、「見たいテレビ番組は、何でも見ることを許している」等、子どものなすがままにさせる「放任的」養育態度（以下、「放任」）2項目であった。母親の食意識尺度は長谷川・今井（2004）の「体に良い食べ物や悪い食べ物の話をする」、「子どもは、大人と一緒に食事をする」等、子どもの食事への配慮に関する8項目を使用した。子どもの食行動の対応は、八倉巻ら（1992）、子どもの食行動の問題上位4項目（偏食、食べ方が遅い、遊び食べ、姿勢が悪い）に関して、実際の子どもへの対応を、3歳から5歳の子どもをもつ母親20名に予備調査を行い、質問項目の選択肢を決定した。母親の基本属性、家庭の経済状況を調査した。

倫理的配慮 質問紙の回答は個人特定できないよう処理し、調査以外の目的で使用しないことを説明した文書を添付した。なお、本研究はお茶の水女子大学COE研究倫理委員会において承認を得た。

得点化 養育態度の質問に関して、「全くない」から「全くその通りだ」の4段階で評価されたものに1～4点を加え、各養育態度得点とした。

子どもの食行動の対応の質問に関して、「子どもの行動を変える」から「子どもの好きなようにさせる」の6

段階で評価されたものに1～6点を与え各項目得点を算出した。子どもの食行動の対応得点とした（Max = 6）。

母親の食意識の質問に関して、「全くない」から「とてもある」の5段階で評価されたものに1～5点を与え合計得点を算出し母親の食意識得点とした（Max = 40）。

結果

養育態度の分類

養育態度の質問項目に関して安定・応答的養育態度得点（0～16点）、厳しい養育態度得点（0～8点）、放任的養育態度得点（0～8点）の合計得点を算出し、さらにそれぞれの得点からZ得点を算出しクラスター分析を行った。その結果、安定・応答的養育態度得点が高い「安定・応答」、厳しい養育態度得点が高い「厳しい」、厳しい養育態度得点が低く放任的養育態度得点が高い「放任」の3群に分類された。各群の人数は安定・応答130名、厳しい133名、放任145名であった。

養育態度の違いによる子どもの食行動の対応の検討

母親の養育態度の違いにより、子どもの食行動の対応が異なるのか調べるために、養育態度3（安定・応答、厳しい、放任）×年齢3（3歳、4歳、5歳）×食行動の対応4（偏食、食べ方が遅い、遊び食べ、姿勢が悪い）の3要因反復分散分析を行った。結果、養育態度の主効果（ $F(2, 405) = 16.70, p < .01$ ）子どもの年齢の主効果（ $F(2, 405) = 6.28, p < .01$ ）、食行動の対応（ $F(3, 405) = 151.97, p < .01$ ）、養育態度×食行動の対応の交互作用（ $F(6, 405) = 2.15, p < .05$ ）が有意であった。食行動の対応得点は、厳しい<安定・応答<放任、5歳<3歳、姿勢が悪い<遊び食べ<食べ方が遅い<偏食の順に5%水準で有意に得点が高かった。また、食行動の対応得点において、下位検定を行った。結果、偏食に関しては養育態度の違いによる得点の違いはなかった。食べるのが遅い、遊び食べ、姿勢が悪い子どもの食行動の対応は、養育態度の違いにより得点に違いがみられ、厳しい<安定・応答<放任の順に5%水準で有意に得点が高かった（Figure1）。

養育態度の違いによる母親の食意識の検討

母親の養育態度の違いにより、母親の食意識が異

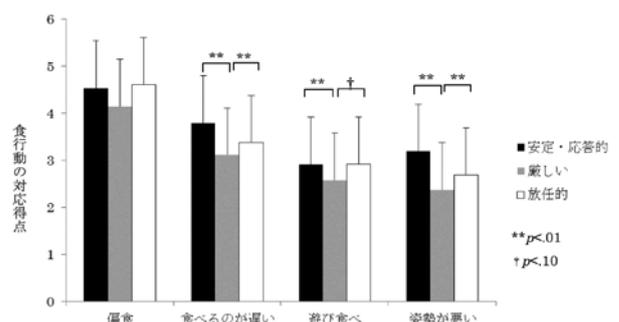


Figure 1: 母親の養育態度別、子どもの食行動の対応得点 (Max=6)

なるのか調べるために、養育態度3（安定・応答、厳しい、放任）×年齢3（3歳、4歳、5歳）の2要因分散分析を行った。結果、養育態度の主効果（ $F(2, 405) = 9.21, p < .01$ ）が有意であり、年齢の主効果（ $F(2, 405) = 2.56, p = .07$ ）は有意傾向であった。母親の食意識得点は、放任 < 厳しい < 安定・応答、3歳 < 5歳の順に5%水準で有意に得点が高かった（Figure2）。

考察

調査1では養育態度の違いにより、子どもの食行動の対応や食意識が異なるのかを検討した。結果、養育態度の違いにより、子どもの食行動の対応や食意識が異なっていた。

安定・応答の母親は、食意識得点、食行動の対応得点共に高く、子どもの食事に配慮し、子どもの状況に合わせた対応をとることが示された。したがって「安定・応答的養育態度の母親の食意識は高い」仮説は支持された。厳しい母親は、遊び食べや食べるのが遅いといった、母親自身のペースが乱される子どもの食行動の問題に対して強制的な対応をしているが、母親自身に直接関わりがない偏食に対しては、子どもの状況に合わせた対応をしていた。したがって、厳しい母親は、子どもの食行動の問題により対応が異なることが明らかになった。さらに、放任の母親の食行動の対応得点は、安定・応答の母親と同様に高いが、食意識得点は低いことから、子どもの食事への配慮が低く子どもの好きなようにさせていることが考えられる。

先行知見から母親の食意識が子どもへのかかわりに影響を与えることが示されている（高畑ら、2006）。調査1では母親がどのような養育態度であるかによって、食意識が異なり、食意識の違いが子どもへの食行動の対応の仕方といった子どもへの関わり方の違いとなってあらわれることが示唆された。子どもへの食事は、養護と教育の機能を併せ持っており、食べさせる側の意図が反映される。子どもに何をどのように食べさせるかは、母親の食事に対する考え方、食意識が反映されることが推測される。そして、母親の食意識の違いが子どもの食事の意義理解に影響を与えることが推測される。調査2では、母親の食意識と子どもの食事の意義理解の関連を検討する。

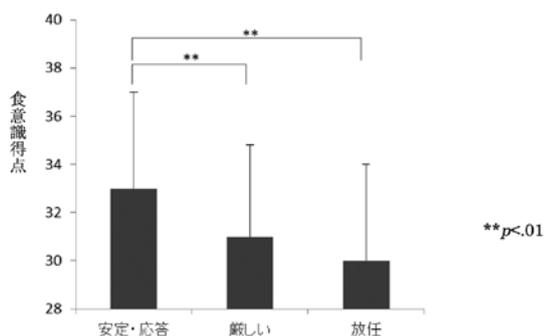


Figure2：母親の養育態度別、母親の食意識得点 (Max=40)

調査2

調査2では、調査1に協力した母親の子ども38名に選択課題実験を実施し、母親の食意識の違いにより、子どもの食事の意義理解が異なるのか検討することを目的とした。母親の食意識得点が平均得点より高い群を食意識高群、平均得点より低い群を食意識低群とし、対象者を2群に分けて、母親の食意識が高い子どもの食事の意義理解は高いという仮説を立て検証した。調査2では、食事の意義を、食事の意義を生物学的なもの和社会的なものに分け、前者は食事を身体健康と関連付けて理解すること、後者は他者と食卓を囲んで食べることを楽しいと捉えることと定義し検討を行った。

方法

対象者 調査1で質問紙に協力した母親の子ども38名、3歳児12名（ $m:3:8, SD:2.84$ ）、4歳児14名（ $m:4:8, SD:3.40$ ）、5歳児12名（ $m:5:8, SD:4.37$ ）。
実施期間 2012年11月から2013年2月。

材料 食事の生物学的意義理解に関する選択課題の材料は、瀬尾・榊原（2013）で用いた、Pちゃんカード（食事カード）とQちゃんカード（間食カード）と、生物学的属性、身体的属性、無関連属性の3属性タイプを使用し、判断を求める12項目を一部改変し使用した。生物学的属性とは大きくなるや長生き等の生物固有の身体現象、身体的属性は力持ちやかけっこが速い等の身体的機能に関すること、黄色が好き、電車が好き等の食事と直接関連のない事柄である。なお、判断を求める属性はTable1に示した。

食事の社会的意義理解に関する選択課題の材料は、瀬尾・榊原（2014）で用いた、一人で食べている絵カード（孤食カード）、家族で食べている絵カード（共食カード）を使用した。

手続き 実験開始前に好きな食べ物等の質問を行った後で、評価者1名が被験児に食事の生物学的意義理解に関して属性判断を求める選択課題実験を実施した。選択課題実験は、はじめに「Pちゃんはいつもご飯食べる子なんだって」、「Qちゃんはいつもお菓子食べる子なんだって」と教示し、2枚の絵カードを子どもの前に提示した。その後、3タイプ（生物学的・身体的・無関連）の属性判断を求める絵カード各4枚（計12枚）を提示し、「どっちが〇〇になると思う」と教示し、どちらの方が各属性を多く有していると思うか判断を求めた。さらに、「どうして〇〇だと思うの」と選択

Table1：選択課題における属性タイプと属性タイプごとの質問項目

属性タイプ	属性
生物学的属性	背が大きくなる・長生きする・病気になるやすい(逆転項目)・太る(逆転項目)
身体的属性	力持ち・ジャンプが上手 ボールを遠くに蹴れない(逆転項目)・かけっこが遅い(逆転項目)
無関連属性	黄色が好き・お花が好き 電車が嫌い(逆転項目)・動物が嫌い(逆転項目)

理由を尋ねた。次に食事の社会的意義理解に関して共食選好を求める選択課題実験を実施した。一人で食べている絵カードと家族で食べている絵カードを子どもの前に提示し、「どっちが好き」と尋ね、選好判断を求めた。さらに「どうして〇〇が好き」と選択理由を尋ねた。

倫理的配慮 評価者は事前に子どもたちと遊ぶ機会をもち、対象者がリラックスして課題に取り組めるように配慮した。対象者の保護者に対し、幼稚園園長、保育所所長より説明をもらい実験の了承を得た。なお、本研究はお茶の水女子大学 COE 研究倫理委員会において承認を得た。

得点化 食事の生物学的意義理解に関して得点化する際に、食事そのものの意義理解ではなく、好きな甘いお菓子ばかり食べるのはいけない子、嫌いな野菜があってもきちんと食事をするのが良い子といった「良い子」理解の問いとして捉えていないか理由づけの回答から確認を行った。「良い子」理解に関する理由づけは、全質問項目に関して2回答のみであったため、食事の意義そのものの意義を尋ねた質問であると判断し属性判断、属性理由づけの得点化を行った。

「ご飯を食べるPちゃん」の方が、背が大きくなる・長生き・病気になりにくい・太りにくい・力持ち・かけっこが速い・ジャンプができる・ボールを遠くに蹴る・かけっこが速い・黄色が好き・花が好き・電車が好き・動物が好きと判断したら1点を与え、属性タイプごとに合計得点を算出し属性得点とした (Max = 4)。さらに食事関連に着目した理由づけに1点を与え、理由づけ得点を属性タイプごとに算出し、合計得点を属性理由づけ得点とした (Max = 8)。

食事の社会的意義理解に関して、家族で食べる絵カードを選好したら1点を与え、共食理由に関して「みんな一緒だから」1点、「みんなで食べるとおいしいから(味覚)」2点、「みんなで食べると楽しいから(感情)」3点として理由づけ得点を算出し、合計得点を共食理由づけ得点とした (Max = 4)。

結果

母親の食意識と子どもの食事の生物学的意義理解の関連

母親の食意識の違いにより、幼児の食事の生物学的

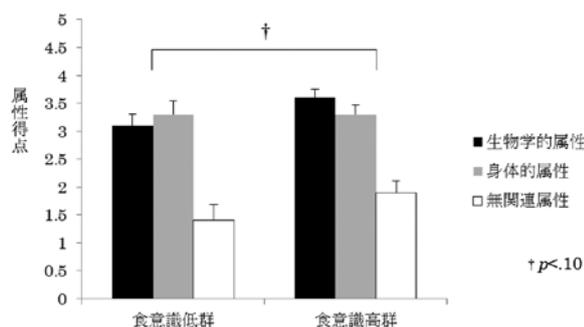


Figure 3: 母親の食意識と子どもの属性得点 (Max=4)

意義の理解が異なるのか検討するために、母親の食意識得点が平均得点より高い食意識高群 (23名)、平均得点より低い食意識低群 (15名) として、母親の食意識 2 (高群、低群) × 属性得点 3 (生物学的属性、身体的属性、無関連属性) の 2 要因反復分散分析を行った (Figure3)。結果、属性の主効果 ($F(2, 36) = 40.52, p < .01$) が有意であり、母親の食意識の主効果 ($F(2, 36) = 2.88, p < .10$) が有意傾向であった。属性は、無関連属性 < 生物学的属性 = 身体的属性の順に 5% 水準で有意に得点が高かった。また属性得点は、母親の食意識の高い子どもの方が、母親の食意識が低い子どもより 5% 水準で有意に得点が高かった。さらに、母親の食意識 2 (高群、低群) × 属性理由づけ得点 3 (生物学的属性、身体的属性、無関連属性) の 2 要因反復分散分析を行った。結果、属性の主効果 ($F(2, 36) = 43.65, p < .01$) が有意であり、母親の食意識の主効果 ($F(2, 36) = 1.52, n.s$) に有意差はなかった。属性理由づけ得点は、無関連属性 < 生物学的属性 = 身体的属性の順に 5% 水準で有意に得点が高かった。

母親の食意識と子どもの食事の社会的意義理解の関連

母親の食意識の違いにより、幼児の食事の社会的意義の理解が異なるのか検討するために、はじめに母親の食意識を独立変数、子どもの共食選好数を従属変数として、母親の食意識 2 (高群・低群) × 子どもの共食選好数 2 (共食・孤食) の χ^2 検定を行った。結果、母親の食意識の違いによる偏りは有意であった ($\chi^2(1) = 4.08, p < .05$)。残差分析の結果、食意識の高い母親の子どもの共食選好数が有意に多く、食意識の低い母親の子どもの孤食選好数が有意に多かった。次に、共食理由づけ得点について母親の食意識 2 (高群、低群) の 1 要因分散分析を行った。結果、共食得点は、母親の食意識の違いにより有意な差が認められた ($F(1, 37) = 4.25, p < .01$)。共食理由づけ得点は、母親の食意識の高い子どもの方が、母親の食意識が低い子どもより 5% 水準で有意に得点が高かった。 (Figure4)

考察

調査 2 では母親の食意識の違いにより、子どもの食事の意義理解が異なるのか検討した。結果、母親の食

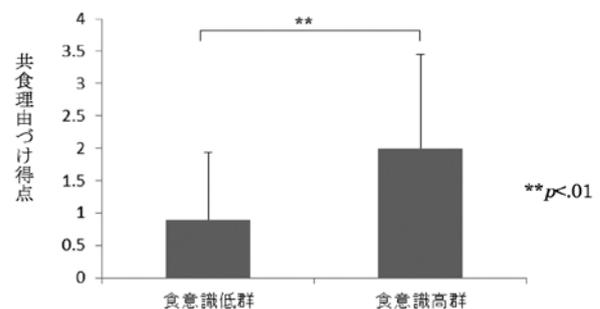


Figure 4: 母親の食意識と共食理由づけ得点 (Max=4)

意識の違いにより、子どもの意義理解が異なっていた。

食事の生物学的意義の理解に関して、食意識が高い母親の子どもの方が、属性判断得点が高かった。瀬尾・榊原（2013）は、食事場面で栄養に関する話題を頻繁に取り上げる保育所の子どもの方が、食事の生物学的意義を栄養に関連付けて理解していることを示している。調査2でも、栄養や食事を話題として取り上げる食意識が高い母親の子どもの方が、食事を身体の健康に関連付けて判断しており、食事の生物学的意義の理解が高いことが明らかになった。また、食事の社会的意義の理解に関しても、食意識が高い母親の子どもの方が、共食を選好しており、共食理由づけ得点が高かった。外山・無藤（1990）は、家族と一緒に食べることの理解は、母親から「一緒に食べると美味しいね」といった食事場面の働きかけにより、子どもは「一緒に食べることは美味しい」と認識し、次第に美味しいといった味覚から、楽しさといった感情に関連付けて理解することを示している。調査2でも、家族で一緒に食事をするを重視する、食意識の高い母親の子どもの方が食事の社会的意義が高かったことが明らかになった。したがって、食意識の高い母親の子どもの方が、食事の意義理解が高く仮説は支持された。

先行知見では、子どもの食行動に母親の食意識が影響を与えることが示されている。調査2の結果から、母親の食意識が幼児の食行動だけでなく、食事の意義理解にも影響を与えることが示唆された。

総合考察

本研究では、母親の養育態度の違いにより幼児の食事の意義理解が異なるのか検討を行った。母親の養育態度の違いにより、母親の食意識、食行動の対応が異なっており、子どもの食事の状況に合わせた対応をとる、安定・応答的養育態度の母親の食意識は高く、食意識が高い母親の子どもは食事の意義理解は高いことが明らかになった。このことから、母親の養育態度は、幼児の食事の意義理解に影響を及ぼす一要因であることが示唆された。

幼児の食事に関する研究の多くが母親と子どものやりとりの中で、どのように子どもの食行動が発達するのかに焦点をあてたものであった。本研究では母親の養育態度と子どもの食事の意義理解の関連を検討したことで、家庭で母親の関わりが幼児の食事の意義理解といった認識に影響を与えることを明らかにした。

これまで、母親の養育態度が子どもの認知発達や社会性の発達、語彙発達に影響をおよぼすことが示されている。さらに、人の発達には遺伝といった生物学的基盤があり（長谷川、2012）身体的特徴だけでなく、知能や社会的態度や性格特性に遺伝的作用をしている（安藤、2011）ことが明らかになっている。遺伝規定

性の高い知能や情緒的安定性は、母親の安定・応答的養育態度と食意識の高さを、子どもにおいては食事の意義理解を生んでいることが考えられる。そして本研究で明らかになったこれらの知見は、食事の意義理解に関わらず、他の様々な要素に適用できると考える。

しかし、母親の養育態度の違いは、母親の食意識だけでなく、食事に関する知識の違いが影響を与えていることが推測される。今後は、母親の食事に関する知識と子どもの食事の意義理解の関連を検討したい。また、養育態度の違いにより、子どもへの関わりがどのように異なるのか観察により詳細に検討していきたいと考えている。

謝辞

本研究にご協力くださいました皆様に御礼申し上げます。また、研究のご助言をいただきましたお茶の水女子大学 内田伸子名誉教授に深謝いたします。

(引用文献)

- 安藤寿康. (2011). 遺伝マインド: 遺伝子が織りなす行動と文化. 東京: 有斐閣.
- 長谷川智子・今井純雄. (2004). 幼児の食行動の問題と母子関係についての因果モデルの検討. 小児保健研究, 63, 262-634.
- 長谷川寿一. (2012). 第2章 発達の生物学的基礎. 根ヶ山光一・仲真紀子(編), 発達の基盤: 身体、認知、情動. 東京: 新曜社.
- 今井純雄. (2005). 食べることの心理学: 食べる、食べない、好き、嫌い. 東京: 有斐閣.
- 木村悦子・上野恭裕・西谷香苗. (2009). 幼稚園・保育所における幼児の食・生活主観についての比較研究. 園田学園女子大学論文集, 43, 85-101.
- NICHD Early Child Care Research Network (2006). The NICHD Study of Early Child Care and Youth Development: Findings for Children up to Age 4 1/2 Years. National Institute of Child Health & Human Development.
- Rozin, P. (1999). Food is fundamental, fun frightening, and far-reaching. Social Research, 66, 9-30.
- 榊原洋一. (2012). アジアの子どものQOL: 生育環境とその格差が子どもの生活の質と精神的健康に及ぼす影響. 平成21～23年 文部科学省科学研究費補助金 報告書.
- 瀬尾知子・榊原洋一. (2013). 幼児の食事の意義理解の発達過程: 園での食事経験が幼児の意義理解に与える影響. 小児保健研究, 72, 663-671.
- 瀬尾知子・榊原洋一. (2014). 幼児期の共食の意味理解: 幼児は共食をどのように捉えているのか?. 日本食育学会誌, 8, 3-8.
- 昌子武司. (1985). 親子関係と情緒. 東京: 教育出版.
- 高畑彩友美・富田圭子・饗庭照美・大谷貴美子. (2006). 母親の食生活に対する意識や生活充実感が幼稚園に通う子どもとのコミュニケーション頻度に与える影響. 日本家政学会誌, 57, 287-299.
- 外山紀子・無藤隆. (1990). 食事場面における幼児と母親の相互交渉. 教育心理学研究, 38, 395-404.
- 外山紀子. (2008). 食事場面における1～3歳児と母親の相互交渉 文化的活動としての食事の成立. 発達心理学研究, 19, 232-242.
- 八倉巻和子・村田輝子・大場幸夫・森岡加代・大森世都子・高石昌弘 (1992). 幼児の食行動と養育条件に関する研究 第1報 幼児の食行動の分析. 小児保健研究, 51, 721-727.
- 内田伸子・李基淑・朱家雄・周念麗・浜野隆・後藤憲子 (2011). 幼児期から学力格差は始まるか: しつけスタイルは経済格差の要因を凌駕し得るか. お茶大・ベネッセ共同研究 報告書.